

氏名(本籍)	崔 ^{ちえ} 吉 ^{きる} 城 ^{そん} (韓国)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第233号
学位授与年月日	昭和60年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	韓国巫俗の社会人類学的研究
主査	筑波大学教授 文学博士 宮田 登
副査	筑波大学教授 文学博士 綾部 恒雄
副査	筑波大学教授 文学博士 北見 俊夫
副査	筑波大学教授 文学博士 野口 鍼郎

論 文 の 要 旨

本論文は、韓国巫俗に関する社会人類学的研究である。韓国には、巫堂(ムーダン)とよばれる巫の存在が、全国的にみられる。かれらを中心とする習俗を巫俗とよび、韓国の重要な民間信仰であると同時に、韓国の精神文化に多くの影響を与えてきている。従来、巫俗研究は、主に国文学や民俗学の立場から巫歌や儀礼についてまとめられてきたが、本論文では、人類学的方法に基づく集約的調査研究の上に立って、総合的に把握し、韓国の社会—文化の構造の中に位置づけることを意図している。全体は、A5判、415頁から成り、Ⅰ部7章、Ⅱ部7章から構成されている。

Ⅰ部第一章「序論」では、従来の研究史を概観し、とりわけ日本人学者秋葉隆の社会人類学的方法に注目する。次に巫俗研究全般に関わる概念枠組を検討・整理している。その中から、降神巫に対する世襲巫を類型化し、研究対象として正当性をもつことを明らかにしている。

第二章「東海岸地域の自然・社会的背景」では、調査対象となった東海岸地域に、何故司祭巫であるタンゴルが存在するのか究明している。とりわけ村祭りである洞祭や別神クツの実態を手掛りに、タンゴルの巫儀の継承性を指摘している。

第三章「巫の集団」では、村とタンゴルとの社会関係をとらえているが、とりわけ分析の中心となっているのは、タンゴルの隠語であり、総数184語の採集とその分析により、タンゴル集団の一体化、身分の隠蔽、巫業の円滑化が行われたとしている。

第四章「アクション・グループの分析」では、クツを行う10名内外の儀礼グループをアクション・セットと規定し、多数の事例を通して構造分析を行っている。その結果、親族の優先、互酬性、

能力中心主義がメンバー構成の原理として存在することが指摘されている。

第五章「巫の血縁と婚姻関係」では、タンゴル集団の内部の社会調査を実施した結果に基づき、かれらの血縁、婚姻関係を分析している。タンゴル集団の特色は、地縁性よりも血縁性が強く、結婚と出自のルールにより入会・世襲され、巫業が学習されることを明らかにしている。

第六章「祭費の分配原理」では、タンゴルが祭りに際して受ける報酬を、儀礼グループのリーダーが、どの様に分配するかを分析し、これがリーダーの個人的能力に依存することを明らかにしている。

第七章「結論」では、以上のようなタンゴル社会の親族構造、アクション・グループ、巫業や社会的身分制について分析した結果として、タンゴル社会には、儒教による社会構造が成立せず、親族も単系的でなく双系的傾向があり、かつそれが職業的社会的身分集団であることが究明されたとしている。

Ⅱ部第一章「序論クツと儀礼」では、巫堂の行うクツを、家庭で死霊を祀る家祭と、村で、豊年や安全祈願を祈る部落祭とに大別し、それぞれに伴う属性を検討、整理している。

第二章「『不浄』の意味」では、韓国の精神文化の中にある「浄」と「不浄」の対立、「聖」と「俗」の対立について考察し、とりわけ女性の不浄については儒教的影響の大きかったことを指摘している。

第三章「巫俗における『家』と『内外』観念」では、家を中心とした空間観念と地縁性の問題が論じられている。家祭は家の内側と外側で行われるが、前者は祖先神、後者は雑神・雑鬼が祭神となっていること、そしてこれは家を聖なる空間、世間を不浄で俗なる空間とする韓国人の観念の反映とみている。

第四章「祖先崇拜の観念と構造」では、祖先崇拜を、巫俗を視野に入れて考察している。このなかで、韓国における祖先のイメージは祖父であり、巫俗の老人像に近いことを指摘し、儒教と巫俗は相互補完的機能をもつことを論証している。

第五章「死霊祭と靈魂観」では、巫儀の一つである死霊祭を分析し、死霊が白い布で象徴的に他界へ送られる点に注目する。とくにそこには死穢をもつ死霊を祖先神に転換させる観念が認められるとしている。

第六章「死霊祭における象徴」では、前章の視点をさらに深め、死霊祭における靈魂観の分析を通じ、死霊と祖先、死霊界と祖先界の区別が論じられている。とりわけ死霊の死穢は、現世の罪が及んだものではないことが明らかにされ、宗教の基盤をなす呪術性のきわめて強いことを指摘している。

第七章「捨婚公主神話の構造分析」では、死霊祭の代表的な巫女神話のバリ公主を通して、その靈魂観、死霊観に関する考察を試みている。その結果、この神話が再生のモチーフで作られ、死霊祭の口誦には、死霊から祖先へ転換させる意味が看取できるとしている。

審 査 の 要 旨

本論文は、韓国の初期巫俗研究者とりわけ秋葉隆によって開拓された社会人類学的調査研究の成果の発展的継承を目的とし、巫俗を一つの宗教的文化複合として体系的に考察した優れた内容をもつものである。

本論文が、従来の研究史上の空白部を埋めたことは言うまでもないが、さらに加えて学界に貢献したと思われる点は3つある。第一は崔吉城氏が、1960年以後半より開始したタンゴル集団に対する長期にわたる調査に基づき、タンゴル社会の実態と構造を、社会人類学的に明らかにしたことである。第二は、東アジアの精神文化の中枢を占める祖先崇拜の問題について、巫俗の関わりから「祖性」を浮彫させることによって、さらに比較研究の視野を拡大させたことである。第三は、タンゴルの司祭者的性格、世襲性の徹底的な究明によって、日本の民俗宗教にみられる類似の要素と客観的に比較し得ることを明示したことである。

ところで本論文がなお今後の課題を残しているとすれば、一つは、降神巫と世襲巫をめぐる概念のあいまいさから生じた類型設定の混乱であろう。このことは国際レベルにおいても、シャマニズムの定義の不明確さがあるが、容易に解決できないにしても、韓国巫俗の位置づけのためには、一層の整理が行われるべきであろう。なお崔氏も自から指摘しているが、東海岸地域にタンゴル社会が強固に維持されている原因については、儒教的影響や仏教の関与の強弱を、歴史性と地域性からめてさらに深化する必要があるであろう。

とはいうものの、本論文が、韓国巫俗研究史上、画期的なものであることはたしかであり、叙上の諸点は、今後崔氏によってさらに充足・展開されることが十分期待され得るのである。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものとみとめる。